

私たちの保育

—園全体でとりくむ保育—

大橋利恵子

朝、急いで保育室に飛び込むと、もう何人かの子どもが、スモックに着がえたり、タオルをかけたたりしている。「おはよう」のあいさつをすると、待っていましたとばかりに、「先生、ブロックしていい?」「外に遊びに行ってくるよ」等々と自分の遊びを始める子ども達である。しかし、全員がどのように飛び出していつてくれるわけではない。自分のロッカーの所でじっと立っている子も居れば、教師のそばから離れられない子も居る。ひととおり、あいさつや朝の準備がすんだところで、何とかこの子ども達が遊べるように声をかけたり、手をつないだり、おもしろそうな遊びに一緒に入ったりしてみる。そうしている間にも、「先生、この箱で何か作りなさい」「先生、ごはんできましたよ」「先生、これスタージン

ガーの〇〇〇だよ」等々、様々に話しかけられたり、頼まれたりする。ひとつひとつ、ていねいに受けとめたい。心ではいつもそう思っているのに、実際には、半分以上の応答が「あら、そう」「どうぞ」「あとでね」「いいわね」等々だけの実にそっけない返事になってしまうのである。一日の保育を終えて、ふと「今日は何をしていたのかしら」と自問してしまふ事もあるぐらい、教師は何かと忙しい。その上、今日は是非、この活動を……と決めている日などは、そこに集まってきた子ども達と遊ぶので手いっぱいになってしまふ。四十人という多人数をかかえて、私の毎日の保育は後悔することだらけなのである。

一人の教師が一日の保育時間の中で出来ることの何と少ないことか。何とかもっと、子どものやりたいことに適切に応じてやれないだろうか。そんな気持は私一人ではなく、となりのクラスの先生も同じであった。そこで同じ活動をやりたい子は、クラスにこだわらず一緒にできるようにして、無駄をばぶこうという話もちあがった。例えば、絵具で絵を描きたい子が両クラスに居て、両方で絵具の準備をしているより、こちらのクラスで準備したら、どちらの子どもも、絵の描きたい子は集まってやれるようにし、他方のクラスの教師は、その他の活動に参加するなり、援助するなりしたほうが、より多くの子どもの要求に応じられるのではないかと考えたわけである。

このような話しあいから、教師間で分担しあって保育する話がまとまった。当時はまだ自由保育に切り替えたばかりだったので、クラス全体で活動することも多く、子ども達も自分のクラスで遊ぶのがあたりまえだった。従って、まず、他クラスの教師にも親しめるよう、鬼ごっこ、フォークダンス、帰りの会等と一緒にする等して慣れていった。最初はなかなかとなりのクラスの部屋に入っていけなかった子ども達も、少しずつ、教師に誘われたり、友だちに連れられたりし

て、どちらのクラスでも遊べるようになってきた。

このような活動を始めたのが四年前、その次の年には、学年単位で分担したり、四歳児五歳児をまぜて行なってみたりした。そして一昨年から、このような活動をさらに広げ、全園の活動として取りこんでみた。まず、教師間で子どもの遊びの様子について話しあい、現在どのような活動を準備したら、子ども達はより楽しく、よりダイナミックに、そして、より充実してじっくりと遊べるだろうか、その遊びをどのようにに環境設定しておけばよいだろうか等々、全員の教師でゆっくりと話しあう。これが、この形態の保育の第一歩、土台となる大切な話しあいである。

当日、教師は自分のクラスの子の受け入れをすませると、朝から分担した活動の準備を始める。やりたくて参加している子は、五歳児も四歳児も、どのクラスの子もみんな一緒にある。昨日から意識をもって遊びに取りこんでいる子も居れば、見ていて入ってくる子も居る。教師から離れられないで一緒にやる子も居るし、こちらで少し、あちらで少しといろいろなコーナーを飛びまわって遊ぶ子も居る。とにかく、自分の遊びたいコーナーで、そこに居る教師と遊ぶ。その日の

活動に興味のない子や、自分でやりたい事が他にある子は、それぞれ自由に遊んでいる。

一日の遊びがすむと、かたづけはレコードの合図で一斉に行なう。それぞれコーナーで自分の遊んだ場でかたづけをすませて、クラスに帰り、給食の準備である。活動の内容によって一日だけのこともあるが、だいたい三日ぐらい、このような形態で遊びを続ける。教師は毎日、子どもが帰った後、その日の子どもの様子を報告しあい、翌日の打合わせをする。その日の様子から、教師の役割分担をしておしたり、材料の準備をしたりする。

このように全園で活動を行なうので、この形態の保育を「全園活動」と呼ぶことにした。

全園活動の内容や形態は、毎回、必ず少しずつ、いろいろなことに気づき、違ってきた。最初は、教師が一日の遊びの環境設定をしっかりとしてみたい、朝から準備された中で子ども達が好きな所で遊ぶといった様子だった。例えば「動物園ごっこ」。六月ごろ、子ども達はザリガニやかたつむり等でよく遊んでいる。そこでクラスで飼っている小動物をみんな集め、庭に出して、ザリガニ、カエル、かたつむり等のコ

ーナーを作り、それにウサギ、アヒルを加えて動物園にした。切符売場、看板を五歳児と用意し、切符を買っては各コーナーに行つて遊ぶようにした。この日一日を子ども達はちょっとしたおまつり気分楽しんでいたようである。ふだん動物に知らん顔の子も自然と仲間入りしていた。ザリガニやカエルをつかめるようになった子もいた。

しかし、この日の活動から、あまりにも教師が準備しすぎて、子どもの自主性や創造性の発揮がみられなかったのではないかとこの反省が出てきた。自主的な子どもを育てたいと願っているのなら、教師が表だってひっぱっていくのではなく、もっと子どもから出発しなくてはならないのではないか。もっと子どもの活動を援助して広げていくようにするにはいけないのではないか等々の話しあいにより、以前より細かく子どもの遊びの状態を把握するよう努力しはじめた。

そこで「水あそび」では、材料や場所の準備はしておいても、先に設定するのではなく子どもの要求によって出していくようにした。遊びとしては、シャボン玉、舟作り、水鉄砲、色水やさん等、いつも必ず出てくる遊びであったが、それぞれ担当した教師と、四歳児も五歳児も一緒になって遊べた。色水やさんでは、教師から表だってやらないようにした

為か、特に盛大なごっこにはならなかったが、五歳児の女子がすり鉢や網を使っていっしょうけんめい色水を作っているのを、四歳児がじっと見ている姿がみられる等、一緒に遊ぶことがよい経験になっていたように思う。

その後、のりものごっこ、お店やさんごっこ、劇遊び等、ごっこ遊びを中心にして、子ども達の遊びの様子をよく把握し、子ども達の遊びを広げていかれるよう注意しながら回を重ねていった。三学期には、ゆうぎ室の大型積木でよく遊んでいることや、巧技台をいろいろに組み合わせ遊ばせたい、冬なのでからだを使う遊びをさせたい等の願いからこれらを使って「ゆうえんちごっこ」をした。卒園まじかのこの時期には、もうかなり友だちと遊びを考えたり、工夫したりできるようになるので、できるだけ友だちと遊びを進めていかれるように考えた。そこで教師は、子ども達の意見を聞く役にまわるように勤めながら、ゆうぎ室の中、いっばいに巧技台や積木が広げられていくのを手伝っていった。

三日目には、ゆうぎ室にはトランポリンと宙つりタイヤが教師によって準備され、その横には、大型積木をならべた迷路のびっくりハウスが出来あがり、園庭には、巧技台によって、二段スベリ台までの道が作られ、切符売場ができ、切符

売りの人、切符あつめの人が出てきた。四歳児はせつせとお金を作っては切符を買い、遊びに参加していた。子ども達がのびのびと遊べていたように思う。

このようにして、全園活動を一年間、積み重ねてきた。その成果としては――

第一に、どの教師にもなじめ、自分の担任にこだわらず、話をしたり、一緒に遊んだりできるようになったことである。それにより子ども達の活動範囲が広がったし、自分のやりたいことを自分でやりに行くこともだいぶできるようになった。

第二には、四歳児と五歳児が一緒になって遊ぶ場がたくさんあったこと。四歳児と五歳児と一緒に遊ぶ中で、四歳児はずい分と五歳児の遊ぶ様子を観察できた。また五歳児は、四歳児をリードしていくような面もみえた。

第三には、ひとりひとりの興味や能力に応じた遊びの場を持ちやすかったことにより、教師が、年齢にこだわらず、個人個人に応じた指導をすることができた。

第四には、教師間の連けいがスムーズになったことにより、活動がダイナミックに展開できるようになったこと、等

々である。

しかし、問題点もいろいろ出された。第一には、あらかじめ教師が話しあいしておくので、どうしても準備しすぎたり、教師のイメージが先行したり、子どもを誘いすぎたり等々、子どもの自然のままの活動から、教師の考えた活動になりがちであるということである。例えば、ゆうえんちごっこでも、宙づりタイヤやトランポリンは本当に必要であったか、たしかに活動としてはもありあがり、子どもも楽しんだが、子どもからの要求ではなかった。

第二には、二百四十名という大人数なので、全員の個性の把握をしきれないこと。第三には、園舎の構造上、園庭ならよいが、屋内ではなかなかやりにくいことにより、活動の取りあげ方がむずかしいこと等が出てきた。

そこで五十四年度は、子どもたちの活動を盛りあげていくことと、日常生活との関連性ということを課題としてスタートした。教師がやりすぎないように注意したことにより、例えば、木工遊びではできあがったものが少なかったとか、ものものごっこでは、切符の自動販売機が出なかった(これは前年にとってもよく遊んでいた)等、前年の活動に比べる

と、活動としての盛りあがりやダイナミックさがいくらか減少したようである。しかしそれらのマイナス面より、子ども一人一人の主体性が十分に生かされるようになってきたというプラス面の方が大切ないように思われる。

秋のお店やさんごっこでは、遠足にいつて取ってきたじゅう玉や木の葉を利用して首かざりを作り、できたもので売るかごごっこが始まった。すると、それまでおへやの柵の上に乗っていた空箱で作ったものや、お花、バック等が利用されだし、いろいろなお店やさんができてきた。しばらくすると、これらのお店やさんをやりたい子が、各クラスにいるので一緒にやるということになった。「○○先生は××やさん」と分担を決め、それぞれやりたいお店やさんに集まった。そこで子ども達がお店の場所や作り方を話しあい、それぞれ思い々々の場所で売り買いごっこをしていた。ここまで遊びが広がってきた所で、教師は、各お店やさんに働きかけ、園庭に集め、看板を作ったり、品物を並べる場所を作ったりして、お店やさんごっこを始めた。子ども達は、お金を作ったり買物をしたり、お店でもうけたお金を持っていったり、お店番と買物に行くのを交替したり、楽しんでた。

それまでは、かたづけの時に全部買ったものをお店にかえ

していただくと、その日は本当に家までもって帰れた。また前年のゆうえんちごっこで出ていた迷路のびっくりハウスも作られ、お客さんを集めていた。どの園でも行なわれているお店やさんごっこで、我園でも毎年行なわれている。形態だけみればあいかわらずなのだと思う。でも、この時、最後にお店を集めて一緒にやるまでは、子ども達が自分でコツコツと続けてきた活動であったこと、そしてこの遊びの中で○組は××やさんではなく、どのクラスの子も一緒になってやりたいお店で遊んでいたこと等は、この全園活動の成果ではないかと思う。

もっと子ども達の要求に応じられるように、もっとダイナミックに遊べるようにと出発したこの保育だが、たった二年間の実践ではまだまだ実験中のようなものである。しかし、私たちの目には、以前より子ども達が、確実に自分のやりたいことを自分で行なうようになってきた。一人一人のやりたいことがはっきりしてきて、それをのびのびと行なえているように見える。そして、クラスにとじこもることがなく、どの教師とも、どの場でも、どの友だちとも遊べるという広い社会性の芽も見られている。

また、教師が常に話しあいをもつことにより、子どもを見る目も自分一人のものでなくいろいろな意見が聞かれるし、クラスの状態を人に伝えなくてはならないことから、より正確に把握しようとする。そして、役割分担も毎回毎回、工夫され、よりよい保育へ向おうという努力がされていると思う。このような良さを生かし、いろいろ出てくる問題点を何とか克服し、子ども達がのびのびと体を動かし、考え、友だちと話しあい、工夫していく姿が見られるように、この全園活動を成長させていきたいと思っている。

◇

◇

今回は、このような形態の保育を行なっているということしか書けませんでした。たぶん、いったい何をしようとしているのか何がなされているのか、よくおわかりいただけなのではないかと、自らの文章力のなさをなげくばかりです。もし、またチャンスがありましたら、この中の一人一人の子どものように、遊びのようすもご報告したいと思っております。このような保育について、ご意見・ご批判がございましたら、是非おきかせください、ご指導ください。

(岐阜市立加納幼稚園)